「男、突っ走る！」

第106回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（24）	『オフィスツリーイン』代表
木内	孝志	（53）	雅也の父
木内	真保	（51）	雅也の母
木内	健次郎	（20）	雅也の弟
住吉	真由美	（42）	『スリジェネアカデミー』ダンス講師
谷岡	典江	（57）	『スリジェネアカデミー』演技講師
上島	譲治	（35）	『スリジェネアカデミー』演技講師
上島	理絵	（28）	『スリジェネアカデミー』演技講師
本村	晴臣	（54）	『スリジェネアカデミー』歌唱講師
加原	美穂子	（35）	『スリジェネ』会計担当兼メンバー
北	まひる	（22）	『スリジェネ』メンバー
加原	千世	（13）	『スリジェネ』メンバー
林	亜里沙	（12）	『スリジェネ』メンバー
赤澤	隆太	（11）	『スリジェネ』メンバー
辻松	翔	（11）	『スリジェネ』メンバー
石田	琴音	（10）	『スリジェネ』メンバー
林	香奈枝	（10）	『スリジェネ』メンバー
磯村	秀樹	（16）	『スリジェネ』メンバー
稲本	美香	（10）	『スリジェネ』メンバー
高橋	沙耶	（12）	『スリジェネ』メンバー

1　木内家・居間（朝）

雅也、孝志、真保がそれぞれテレビを見たり、スマホをいじったりしている

――スーツ姿の健次郎が出てくる。

健次郎「ネクタイって、どうやってやるの？」

雅也「お、ビシッと決まったか、新成人」

真保「とうとう、健も成人式か。早いわねぇ」

孝志「俺たちも歳をとるわけだ」

真保「やめてくれる、そういう言い方するの」

孝志「はいはい」

健次郎「ネクタイ分かんねえ」

雅也「ちょっと貸してごらん」

と、健次郎からネクタイをもらうと、ネクタイを締めながら、

雅也「長い方があるでしょ。これを二回巻いて、一番奥から通して……後は短いほうと調整しながら……はい、これで完成」

健次郎「サンキュー」

雅也「せっかくだし、玄関で写真撮ろうか」

2　同・玄関

健次郎を真ん中にして、両側に孝志と真保が並んでいる――スマホのカメラを向けている雅也。

雅也「撮るよ。はい、チーズ。（とシャッターボタンを押す）はい、オッケー。（と真保にスマホを渡して）二人で撮るから、写真お願い」

真保「はいはい」

雅也と健次郎が横並びになる。

雅也「健、お前手で『二』作れ。兄ちゃんが『ゼロ』作るから、『二十』になるでしょ」

健次郎「しょうがねえな」

雅也「記念なんだから」

健次郎「分かったよ。（とピースサインをする）」

雅也、手で『ゼロ』を作り、健次郎の手の隣に来るように手を挙げる。

真保「良い？」

雅也「良いよ」

真保「はい、チーズ（とシャッターボタンを押す）」

雅也「（健次郎に）会場って、総合体育館？」

健次郎「ああ」

雅也「市内の全成人が集まるから、結構混雑するよ。早めに行った方が良いし、友達と会うんならはぐれないように」

健次郎「はいはい」

真保「じゃあ、私送ってくるわ。車のキー取ってくる（と中へ入っていく）」

孝志「二次会は決まってるのか？」

健次郎「公民館で立食式のパーティーやるんだって」

雅也「どうせ飲んでくるんでしょ。帰りは、酔い覚ましに歩いて帰ってくるのも良いか

もね」

健次郎「公民館からここまでどれぐらいかかるると思ってるんだよ」

雅也「ニ十分ぐらい歩いたら着くでしょ。運動がてら良いんじゃない」

健次郎「普段体動かさない兄貴にそんなこと言われたくねえよ」

雅也「『スリジェネ』のレッスンで、ちゃんと体動かしてるから、大丈夫なの」

と、真保が出てくると、

真保「ほら、行くわよ」

健次郎「はいはい。じゃあ行ってきます」

と、真保と共に去っていく。

3　同・居間

雅也と孝志が戻ってくる。

孝志「あいつももう成人か。小学校の時も中学校の時も、何もしてやれなかったからな」

雅也「ちょうど九州に単身赴任してた頃だも

んね。健も、特に中学の時は大変だったよ。クラスで馴染めなかったり、修学旅行のバスが事故ったりさ。まあ、それを考えれば高校の時は比較的平和だったと思うけど」

孝志「でも、会社を辞めたのは意外だったな」

雅也「あれは驚いたよ。いきなり辞めてきたって、昼間に帰ってきたでしょ。まあ、先輩からの嫌がらせは、場合によってはハラスメントになるからね」

孝志「ハラスメントか……。気を付けないといかんな。昔みたいにはいかないんだよ」

雅也「そりゃ父さんの時とは時代が違うって」

孝志「飲み会も参加しない奴が多いんだもんな」

雅也「当たり前だよ。自腹切って、勤務時間外まで先輩とか上司と一緒に酒の席になんか、付き合いたくないに決まってるもん」

孝志「けどさ、酒の席でしか話せないことと

か、身の上相談とかってあるじゃないか」
雅也「そういう相談を、根本的にしたくないんだよ。話したって、上の人はどうせ過去の栄光と胡散臭い説教しか言うことないんだから。そもそも、基本的に仕事でしか一緒にいたくない上司や先輩に身の上相談なんてするわけないじゃん」
孝志「時代も変わったねぇ……」
雅也「別に、昔を否定するわけじゃないけど、今は今としてちゃんと時代に合った生活をしなきゃいけないの。『昔はこうだった』なんて、そんなのただの言い訳にしかならないんだから」
しょっぱい顔の孝志。

4　住吉ダンススタジオ

住吉の手拍子に合わせて、ダンスのターンの練習をしている雅也、まひる、美穂子、千世、亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀樹、美香、沙耶。

雅也、つまずきそうになる。
雅也「危なッ……」
住吉「うっちーは体幹をもう少し鍛えたほうが良いわね。体のバランスが悪いと、ターンもキレイに回らないから」
雅也「はい」
住吉「（一同に）はい、じゃあ次、グランプリエの復習をやりますよ。ワンツースリーでいきますよ。はい、ワン、ツー、スリー」
と、住吉の手拍子に合わせてそれぞれグランプリエをする一同――一人キレ良く行う沙耶。
まひる「さすが、バレエ経験者の沙耶ちゃんは綺麗に回るね」
雅也「羨ましいな」
まひる「おっさんみたいになってるじゃないですか、うっちー」
雅也「そりゃ、そうなるさ」
×　×　×

プリントを見ながら歩いて回っている谷岡――メンバー一同、プリントを見ながら『あめんぼ』を読んでいる。

一同「あめんぼ赤いなあいうえお、浮き藻に小エビも泳いでる。柿の木栗の木かきくけこ、きつつきコツコツ枯れけやき」

谷岡「みんな、おへその下のあたりにグッと力を入れることを意識して読んでみて。はい、続けて」

一同「ささげに酢をかけさしすせそ、その魚浅瀬で刺しました。立ちましょらっぱでたちつてと、トテトテタッタと飛び立った……」

×　×　×

電子ピアノで、各音域のキーボードを叩いている本村――一同、立った状態でその音を聞いている。

本村「これが『ド』の音、これが『ミ』の音。この二つが被ると上パートと下パートのハーモニーが上手くできるの。けど、このキ

ーがズレると、すごく気持ちが悪くなるの。
行くよ」
と、キーのズレた音楽を弾く――一同、
険しい顔になるが、一人雅也だけは不
思議そうな顔をしている。
千世「うわ……」
本村「気持ち悪いでしょ。これが、キーのズ
レ」
美穂子「こんなに耳障りというか、モヤモヤ
する音になるんですね」
本村「そういうこと」
亜里沙「あれ、うっちーがキョトンとした顔
してる」
雅也「……」
まひる「え、うっちー気づいた？」
雅也「全然分かんない」
香奈枝「うそー」
琴音「え、うっちーこれ全然分かんない
の？」
雅也「（本村に）ハルさん、もう一回弾いて

もらって良いですか？」
本村「うっちー、よく聞いててよ」
雅也、必死で耳を澄ませる――本村がキーのズレた音楽を演奏する。
一同、険しい顔になる。
雅也「……やっぱり分かんないわ」
秀樹「マジっすか、うっちー」
雅也「え、ヒデ分かる？」
秀樹「分かりますよ」
雅也「分かんないよ、本当に……」

5　喫茶店

N「それからしばらく経ったあるレッスンの帰り、僕は隆太と一緒に近くの喫茶店でお茶をすることにしました」
雅也と隆太がメニュー表を見ている。
隆太「うっちーさんは、何にしますか？」
雅也「え……、じゃあサンドウィッチにしようかな」
隆太「僕はホットドックにします」

雅也「どうしたの、りゅーた？」
隆太「何がですか？」
雅也「俺に敬語だなんて、珍しいじゃん。いつものりゅーたで良いんだよ」
隆太「いや、うっちーさんと二人なんで」
雅也「（笑って）二人だと緊張しちゃう？まあでも無理ないか。俺も、十三歳年上の人と一緒に喫茶店行ったら、やっぱり緊張しちゃうもんね」
隆太「はい……」
サンドウィッチとホットドックをそれぞれ食べている雅也と隆太。
雅也「そっか。りゅーたは、将来俳優になりたいんだ」
隆太「はい」
雅也「こういう活動してたら、そうなるよね。俺もね、最初に物語を作ったのは小学四年生だったの。当時の担任の先生がね、国語の授業で物語の単元をやったときに、突然泣き始めたの」

隆太「どうして泣いたんですか？」
雅也「感情移入して、感極まって泣いちゃったんだって」
隆太「へえ」
雅也「その時に、文章だけで人を泣かせたり、笑わせたりするのはすごいなって思ってね、そこから文章に興味を持って、今に至る」
隆太「うっちーさんも、いろいろやってたんですね」
雅也「専門学校入ってからは、友達と一緒にドラマ作ったり、フリーペーパーの事務所でアルバイトして連載小説書いたりね。今となっては、全部良い思い出」
隆太「すごいですね」
雅也「経験値としては、まだまだだよ。それにね、俺はみんなと違って、子どもの頃から演劇とかミュージカルなんて出たことがなかったの。『スリジェネ』に入って、初めて発声練習とか、それこそ『あめんぼ』とかいろんなことを勉強したの。だからこ

れからりゅーたも、たくさん勉強できるチャンスがあると思うよ」

隆太「はい、頑張ります」

微笑んで頷く雅也。

6　住吉ダンススタジオ

ホワイトボードの前で話している譲治

――傍らに理絵。

雅也、まひる、美穂子、千世、亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀樹、美香、沙耶が体操座りをして聞いている。

譲治「今日は演技論についてお話をしようと思います。皆さん、セリフを覚えようと思って台本を読みますよね。でも、演技論としては、これはあまりお勧めをしません」

沙耶「どうしてですか？」

譲治「やっぱりそう思うよね。お芝居っていうのは、当然前提として脚本があって、演者たちはそれ見ながら稽古を重ねて、一つの作品を完成させていきます。でも、もし

セリフが本番中に飛んじゃったら、どうします？」

沙耶「……」

美香「はいッ（と手を挙げる）」

理絵「はい、美香ちゃんどうぞ」

美香「アドリブで乗り切る」

譲治「おお、すごい根性だね。でも、確かにそれも一つの手です。じゃあ例えば、そのアドリブっていうのは、どうやって頭の中で考える？」

翔「キャラクターですか？」

譲治「そう。まさに今翔が言ったように、これまでその役を演じたことで、その役がどんな風に話すのか、どんな性格なのか、つまりそのキャラクターっていうのは作られてますよね。だから、セリフっていうのは台本の言葉をただ読むのではなくて、みんながそれぞれ演じている役、つまりキャラクターがその状況の中で発した言葉というのがセリフなんです。セリフを覚えるのは

大前提ですが、ただ自分の頭の中で覚えたセリフを口にすれば良いというわけではありません。役を演じるというのは、そういうことなんです。暗記した言葉を発した中に、感情のキャッチボールがあるわけです」

マジマジと聞いている一同。

N「『スリジェネ』の活動を始めて約二年。これまで、ヤマさんに様々なことを教えていただきましたが、譲治先生のような演技論を教わったのは初めてでした。翔が言ったように、作り上げてきたキャラクターというのは、確かに稽古の中で作り上げた中で確立されているもので、こういう話を聞いて、自分の脚本の中で生かさなければいけないなと思いました。もっともっと『スリジェネ』の活動をやっていこうと思っていた矢先、日本、いや世界各国では思いがけない事態に遭遇していました」

7　木内家・居間

雅也、孝志、真保、健次郎がテレビのニュースを見ている――アナウンサーがニュース原稿を読んでいる。

アナウンサー「速報が入ってきました。新型コロナウイルス感染による、初の日本人死者が確認されました。繰り返します……」

雅也「コロナウイルスで、死者……」

孝志「会社の中国支社のほうでも、今大変なことになってるらしい」

真保「関東のほうで広がってるみたいだけど、こっちは大丈夫なのかしら？」

健次郎「インフルみたいに、手洗いうがいとかをちゃんとしてれば大丈夫だろ」

真保「そうだと良いんだけど……」

孝志「どうなるかな……。中国でも死者が増えると、向こうの製造ライン止まるんじゃねえかな」

真保「そうよね……」

雅也「感染したら、高確率で死ぬってことか

な」

真保「変なこと言わないでよ」

不安そうにニュースを見ている雅也。

N「しかし、新型コロナウイルスの感染拡大は思いのほか拡大し、初の死者が確認されてから間もなくの二月二十一日には、日本国内の累計感染者数が百人を超える事態となってしまったのです。そして……」

8　テレビ映像

安倍総理大臣が、『三月二日から日本全国の小中高校の臨時休校要請』を発表している。

N「三月に入ると、全国の小中高校が臨時休校となってしまったのでした」

9　住吉ダンススタジオ

休憩中――雅也、まひる、美穂子、千世、亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀樹、美香、沙耶が集まって話してい

る。

千世「亜里沙ちゃんも沙耶ちゃんも、せっかくもう少しで小学校の卒業式だって言うのに、休校になるなんて残念だったね……」

亜里沙「卒業式まで学校休みなんだよ。しかも、卒業式だって在校生は休みになって、体育館には六年生しか来ちゃダメなんだって」

沙耶「うちの学校も一緒」

秀樹「まさかこんな事態になるなんてね……」

美穂子「まひるちゃんの家の鰻屋さんも、大丈夫？　影響出てるんじゃないの？」

まひる「団体予約のキャンセルが何組も続いてるんです。普段の営業は良いんですけど、座敷を使う団体キャンセルがこれ以上続くとなると……。（と雅也に）うっちーも、仕事の影響出てるんじゃないですか？」

雅也「まあね。取材時期を延期にしたり、あとイベントのパンフレットとかの案件もあ

ったんだけどイベントの延期をする方向だから、制作のストップがかかっちゃってね。愛知県に直接、まだそんな影響があるとは思えないけど」

美穂子「油断は禁物かもしれませんよ。もう国内だけで感染者数が百人超えてるって言ってましたし」

雅也「……」

琴音「ねえ、うっちー。『スリジェネ』は、どうなっちゃうの？」

美香「そうだよね」

香奈枝「ねえ、どうなっちゃうの？」

隆太「うっちー」

翔「うっちー」

雅也「それは、また国枝さんや講師の先生たちと会議で決めることになる。だから、今の段階でどうなるかは分からない」

美穂子「ここも、休校ってことになるんですかね？」

雅也「直接感染の影響がなければ、問題なく

続けると思いますよ。小中高校の休校要請は、あくまで政府が発したことで、民間のこういう習い事まで休みにしたら、それこそ経営の面でも厳しくなりますし」

美穂子「この影響で、倒産する会社も出てくるかもしれませんね」

雅也「ええ……」

亜里沙「学校も休みになって、『スリジェネアカデミー』も休みになるなんて、嫌だよ……」

雅也「アリサ……」

美穂子「（雅也に）近いうちに、運営会議したほうが良いかもしれませんね」

雅也「そうですね」

不安そうな顔の雅也。

N「思いがけない、新型コロナウイルス感染症による影響。先の見えない不安な気持ちだけが募っていきました」

つづく